

千葉県漢詩連盟

平成二十六年三月 第二号

千葉詩織

目次

千葉詩藻 第二号発刊に寄せて

作品

(顧問) 石川忠久 (会長)

相澤克典 青木智江 秋葉暁子

市川恵美子 井上夏央里 岩澤和枝

小澤克日 挿川勝司 金子完治
大村成憲 久保洋之 齋藤昭二

齋藤三千代 佐久間ちか代 椎名廣

菅原 満 杉山正男 曾雌幸己枝

鶴岡志津子 富樫美代子 長島ツタエ

宮本美恵子 森崎直武 矢尾晃

山田緑代子

千葉県漢詩連盟・役員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

入会のご案内

編集後記

『千葉詩藻』第二号発刊に寄せて

会長 鷲野 正明

『千葉詩藻（せんようしそう）』は、日頃温めてきた作品や一年間でもつとも気に入った作品を掲載すべく、昨年第1号が発刊されました。会報（年一回発行）や『房総風雅』（五年に一度の発行）とはまた違う発表の場として大変好評を得てここに第2号をお届けする運びとなりました。今号の作品数は前号に比べて若干少なくなっていますが、レベルは着実にアップしています。平成二十五年、吟行会は二回行いました。一回目は、五月一八日、柴又帝釽天を見学し、矢切の渡しの船に乗って「野菊の墓」の地を訪れ、伊藤左千夫の文学碑などを見て回りました。第二回は十一月十四日。千葉寺（せんようじ）・亥鼻城公園の歴史博物館（千葉城址）・千葉神社を巡りました。研修会は、八月四日、十二月二十二日の二回でした。梁川星巖が五十三歳の天保十二年（一八四一）三月から七月までの五ヶ月間、妻の張紅蘭を伴い房総の旅をしたときの詩集『浪淘集』を、版本に拠つて精読しています。この研修に参加して、漢文読解力と詩心が養われた、という声をよく耳にします。作詩の初級講座・中級講座も開催しています。添削指導も隨時行っています。講演会も行っています。漢詩を読み、作る機会はいくらでもあります。これらの行事に益々多くの会員が参加し、益々多くの詩を作り、「琴線に触れる詩」を目指していきたいものです。

顧問 岳堂 石川忠久

桃源境

誰道桃源理想境

漁夫迷路弄空談

世人不識箇中味

陶老全生六十三

桃源境

誰か道ふ 桃源は理想の境と

漁夫路に迷ひて空談を弄するのみ

世人識らず 箇中の味

陶老生を全うす六十三

会長 翔堂 鶴野正明

矢切渡

矢切の渡し

大呼欲應百尋閒

舟載幽愁老客還

看鳥看魚懷昔日

碧天碧水映童顏

大呼すれば応へんと欲す
百尋の間

舟は幽愁を載せて老客還る

鳥を看魚を見て昔日を懷ひ

碧天碧水童顔に映ず

八鶴湖吟行

八鶴湖吟行

流山市

無有

相澤克典

房州佳景勝江都
爛漫櫻花紅映湖
往古將軍田獵處
相呼水鳥問榮枯

房州の佳景江都に勝る
爛漫たる桜花紅湖に映ず
往古の將軍田獵の処
相い呼ぶ水鳥栄枯を問ふ

椰子之実

船橋市

青木智江

夕暮踏沙徐獨行
忽看一子汎波明
遙思椰樹初繁島
萬里鄉愁萬里程

夕暮沙を踏んで徐に独り行けば
忽ち看る一子波に汎いて明らかなるを
遙かに思ふ椰樹初めて繁りし島
万里の郷愁万里の程

和光市 暁風 秋葉暁子

夏山

杉樹陰濃鹿野山

杉樹陰濃やかなり鹿野山

白雲落影過辱顏

白雲影を落として辱顔を過ぐ

涼風吹裏更探勝

涼風吹裏更に探勝す

九十九溪離俗寰

九十九溪離俗の寰

冀筑堂翁長壽

彷徨生死少年兵

生死を彷徨す少年兵

歸國挺身護帝城

帰国身を挺して帝城を護る

今日隱棲時嘯詠

今日隱棲して時に嘯詠すれば

吟聲朗朗赤誠盈

吟声朗々赤誠盈つ

船橋市

轟風

井伊直允

筑堂翁の長寿を冀う

生死を彷徨す少年兵

生死を彷徨す少年兵

歸國身を挺して帝城を護る

歸國身を挺して帝城を護る

今日隱棲して時に嘯詠すれば

今日隱棲して時に嘯詠すれば

吟聲朗朗赤誠盈

吟聲朗朗赤誠盈

傘壽有感

傘寿感有り

市川市

祐城

飯塚

勇

跋涉山河八十年

山河を跋渉して八十年

幾多苦樂思綿綿

幾多の苦楽思い綿々たり

今朝吟詠又傾盞

今朝吟詠して又た盞を傾け

相願長迎佳節天

相い願う長く佳節の天を迎えると

颶風一過

柏市

颶風一過

石田寿信

狂風忽過市城鮮
きょうふううち過ぎて市城鮮やかなり

綠葉蒼蒼映碧天
りょくようそうそうへきてんえいづ

銀色飛機如鳳鳥
ぎんじよくひきはふこうの如く

一條白線遠昇仙
いちじょうはくせんとおせんのぼる

秦野市 溪燕 市川恵美子

蝉聲如雨

せんせいあめ
蝉声雨の如し

早朝睡覺聽新蟬

そうちょうねむ
早朝睡り覚めて新蟬を聴く

信步南蹊水竹邊

まか
歩に信す 南蹊 水竹の辺

綠樹公園疑下雨

りょくじゅうこうえん
綠樹の公園 下雨を疑う

清音疊々蕩塵緣

せいおんのけい
清音疊々 疊々を蕩う

夏雨

夏雨

市原市

井上夏央里

雷聲隱隱絕炎氣

らいせいいんいん
雷声隱々 炎氣を絶ち

白雨豪然草木欣

はくうごうぜん
白雨豪然として草木欣ぶ

懶出小齋孤靜坐

いのう
出づるに懶く 小齋に孤り 静坐すれば

清風颯颯入窓薰

せいふうさつき
清風颯々 窓に入りて薰ず

八千代市 淑眞 岩澤和枝

柳蔭放舟

柳蔭舟を放つ

岸柳涼陰短艇横
篙夫解纜逐雲行
群飛白鷺相從處
翦水迎風心亦輕

岸柳の涼陰短艇横たわる
篙夫纜を解き雲を逐つて行く
群飛する白鷺相い従う処
水を翦り風を迎え心亦た軽やかなり

船橋市 白楊 薄井喜美子

消夏三日月温泉

消夏二日月温泉

海村薄暮磯頭を歩せば

午炎洗い尽して心自ずから悠なり
遠く看る鉤の如き三日の月

幽玄の清夜復た何をか求めん

海村薄暮歩磯頭
洗盡午炎心自悠
遠看如鉤三日月
幽玄清夜復何求

越舊天城峠

柏市

蹊山

薄井

隆

旧天城峠を越ゆ

杉徑羊腸煙霧濛たり

溪頭花發きて一株紅なり
纏かに隧道を穿てば陽光耀き
忽ち見る大鳶碧空を旋るを

杉徑羊腸煙霧濛

溪頭花發一株紅
纏穿隧道陽光耀

忽見大鳶旋碧空

小園薔薇

東京都

小園薔薇

岡安千尋

閑庭雨霽露珠繁

先妣薔薇覆繚垣

馥郁忽懷年少事
風來漾漾亂紅翻

閑庭雨霽れて露珠繁し
先妣の薔薇繚垣を覆う
馥郁忽ち懷う年少の事
風来り漾々として乱紅翻る

雪中蠟梅

流山市 州風 小澤克巳

早晨寒氣破甘眠
窗外皚皚正似仙
牆角忽看黃的爍
幽香一夜絕塵緣

早晨寒氣甘眠を破る
窗外皚々正に仙に似たり
牆角忽ち看る黃の的爍たるを
幽香一夜塵縁を絶す

能州

隧道穿行春日山
白雲驟雨小村閒
晨尋輪島回朝市
看盡能州心自閑

柏市 溪侍 掛川勝司

能州

隧道穿ち行けば春日の山
白雲驟雨小村の間
晨に輪島を尋ねて朝市を回り
能州を見尽くして心自ずから閑なり

江樓晚景

流山市 江樓晚景

こうろうばんけい

静修

金子完治

曳曳暮煙江畔樓
紙窓開放斷雲流
波間瞥見跳魚影
逝水光搖月一鉤

えいえい暮煙江畔の樓
紙窓開け放てば断雲流る
波間瞥見す跳魚の影
逝水光は揺れ月一鉤

故鄉有信

船橋市 耕浪 菅野俱之

こきょう
故郷より信有り

柿子林檎寄故郷
都城小舎溢秋香
北邊搖落嚴冬到
親舊遙懷仰月光

ししゃ
柿子 林檎 故郷より寄せられ
とじょう
都城の小舎 秋香溢つ
ほくへん
北邊は搖落して 嚴冬到らん
しんきゅう
親旧 遙かに懷い 月光を仰ぐ

遊夏夜

清宵煙火滿天開
映若萬花轟若雷
一瞬幼兒踞塞耳
指呼光彩笑顏回

八千代市 聖山 菊田祥子
夏夜に遊ぶ

清宵煙火滿天に開く
映ずること万花の若く轟くこと雷の若し
一瞬幼兒踞つて耳を塞ぐも
光彩を指呼して笑顔回る

千葉市 旭峯 北原豪彦

旭峯流創立四十五周年を賀す

縁を得て相遇ひ天恩に謝す

日吟研に励んで一門を盛んにす

四十五年無限の喜び

共に労苦を称えて金樽に醉ふ

賀旭峯流創立四十五周年

得縁相遇謝天恩

日勵吟研盛一門

四十五年無限喜

共稱勞苦醉金樽

八千代市 聖山

菊田祥子

遊夏夜

かや 夏夜に遊ぶ

清宵 煙火 滿天に開く

映ずること万花の若く轟くこと雷の若し

一瞬 幼児 踏つて耳を塞ぐも

光彩を指呼して笑顔回る

清宵煙火滿天開
映若萬花轟若雷
一瞬幼兒踞塞耳
指呼光彩笑顏回

賀旭峯流創立四十五周年

得縁相遇謝天恩

日勵吟研盛一門

四十五年無限喜

共稱勞苦醉金樽

千葉市

旭峯

北原豪彦

旭峯流創立四十五周年を賀す

縁を得て相遇ひ天恩に謝す

日吟研に励んで一門を盛んにす

四十五年無限の喜び

共に労苦を称えて金樽に酔ふ

習志野市

春虛

木村成憲

日本平望富士山

日本平より富士山を望む

臨海青青三保松

穿天縹渺玉芙蓉

水光山色供爭美

從古稱揚衆嶽宗

海に臨んで青々たり三保の松
天を穿つて縹渺たり玉芙蓉

水光山色供に美を争い

古より称揚さる衆岳の宗と

遊源光庵

町田市　　凰洋　小久保洋子

源光庵に遊ぶ

遠く秋色を探る洛陽の東

庭院霜を経て葉々紅なり

景は双窓に嵌つて方に絵画のぞとし

遠探秋色洛陽東
庭院經霜葉葉紅
景嵌雙窓方繪畫

搖搖迷悟任西風

ようよう
ようよう
ようよう
よめいご
せいふう
まか

西風に任す

東京都

蕙芳

齋藤昭子

冬驛別離

冬駅別離

喔 喔 晨 鷄 客 枕 驚

五 更 殘 月 照 離 情

板 橋 鞋 跡 繁 霜 上

行 矣 前 途 萬 里 程

喔々たる晨鷄客枕驚く

五更 残月離情を照らす

板橋 鞋跡 繁霜の上

行矣 前途万里の程

春日郊行

松戸市 桂香 斎藤かつい
春日郊行

遲 日 逍遙 野 色 齊

村 郊 十 里 入 芳 跤

花 間 綠 樹 流 鶯 嘸

歩 步 陶 然 歸 路 迷

ちじつ しようよう やしき せい

そんこう じゅうり ほうけい

かかん りょくじゅ りゅうおうさえず

ほほ とうぜん きる まよ

中秋望月

町田市 恭泉 斎藤恭子

中秋月を望む

籬邊 馥郁として桂香流れ

庭樹 陰々露氣浮ぶ

遙かに憶う故人三五の夕べ

月娥 静かに照らす一天の秋

籬邊 馥郁桂香流
庭樹 陰陰露氣浮
遙憶故人三五夕
月娥靜照一天秋

歳暮祭詩

市川市 洗鶯 斎藤房江

歳暮祭詩

詩人連夜独り長嘆す

一字の推敲 灯忽ち残う

除夕幾篇几上に堆し

酒肴俱に供え心を放ちて看る

詩人連夜獨長嘆
一字推敲燈忽殘
除夕幾篇堆几上
酒肴俱供放心看

詩人連夜独り長嘆す

一字の推敲 灯忽ち残う

除夕幾篇几上に堆し

酒肴俱に供え心を放ちて看る

賀盟友新築

市川市 皓嬉 齋藤三千代
盟友の新築を賀す

亭亭新屋喜竣成

亭々たる新屋竣成を喜ぶ

隨處美裝祥色盈

隨處の美裝祥色盈つ

應是兒孫通宿志

應に是れ兒孫に宿志を通すべし

滿堂賀客酌金觥

堂に満つる賀客金觥を酌む

雪中作

市原市 溪泉 佐久間ちか代
雪中の作

烈風捲雪客心驚く

烈風雪を捲いて客心驚く

山野皚々玉樹生ず

山野皚々玉樹生ず

視界模糊として車進まず

視界模糊として車進まず

延々緩慢帰程杳なり

延々緩慢帰程杳なり

延延緩慢杳歸程

延延緩慢杳歸程

烈風捲雪客心驚

山野皚々玉樹生

視界模糊車不進

延延緩慢杳歸程

飯岡漁港觀卸鱸業有感

早曉港頭魚氣香
鱗盈漁網喚聲揚
衆人不識繁榮裏
餘剩爲肥田圃場

匝瑳市 耕道 椎名 廣

いいおかぎょこう
いいおかぎょこう
いわし
おろ
ぎょう
み
かんあ

そうぎょう
こうとう
ぎょき
かんば

うろこ
ぎょもう
ぎょき
かんば

しゅうじん
しゅうじん
み
かんせいあが

よじよう
ひ
と
み
でんほ
じょう

午夢

携手追香花影途
並肩泛艇鳥聲湖
醒然笑語尚如有
染蒨窓前落日孤なり

船橋市

清水直美

て
手を携へ香を追ふ花影の途
肩を並べ艇を泛かぶ鳥声の湖
醒然笑語尚ほ有るが如し

賞牡丹

牡丹を賞す

船橋市

蕗山

清水義孝

大花凝露艷紅衣

容色娟娟自發鬱

忽想晚春絲雨下

沈香亭裏傘中妃

大花露を凝らして 紅衣艷めかし

容色娟々として 自ずから鬱を発つ

忽ち想ふ 晚春絲雨の下

沈香亭裏 傘中の妃を

籬畔蟲聲

籬畔虫声

八千代市 隨貞

菅原涼子

玲瓏月上小籬東

青草輕搖颯爽風

好是啾啾還唧唧

秋宵鳴盡可憐蟲

玲瓏として月は上る 小籬の東

青草 輕やかに搖る 颮爽の風

好し是れ啾々還た唧々

秋宵鳴き尽す 可憐の虫

八千代市

有恒

菅原 満

次鶴湖唱和

鶴湖唱和に次す

初晴風日點塵無く

樹下陶然傾酒壺

花氣騰騰盈舊陽

水光激激侵新蒲

將軍愛景歡何極

騷客吟詩興不孤

正是東金名勝地

酣春忘返小西湖

将軍 景を愛で
騷客 詩を吟じて

正に是れ 東金の名勝地

酣春 返るを忘る小西湖

水光激々 新蒲を侵す

將軍 景を愛で 鶴

騷客 詩を吟じて 興

正に是れ 東金の名勝地

酣春 返るを忘る小西湖

市川市 溪雲 杉山正男

遊足利花園

足利花園に遊ぶ

信歩佳園春色誇
微風習習忽開花
紫藤大樹別天地
一醉遊人賞物華

歩に信せば佳園春色誇り
微風習々忽ち花を開く
紫藤の大樹別天地
一醉の遊人物華を賞す

我孫子市 如蘭 曽雌幸己枝

秋月清涼

雨餘樓上月華浮

秋月清涼

如晝明光庭院幽

昼の如き

明光

庭院

幽

かなり

滿地清涼秋漾漾

満地の

清涼

秋漾々

蛩聲籬畔轉催愁

蛩声

籬畔

轉催

愁を催す

高橋秀彰

東京都

秋日山行

信步山中獨訪秋
停筇小立石溪頭
鳴禽何處搖枝去
一片紅於入水流

歩に信せて山中獨り秋を訪ぬ
筇を停め小立つ石溪の頭
鳴禽何れの処か枝を搖がせて去る
一片の紅於水に入りて流る

船橋市 眉山 田中 洋

想四國遍路

一杖託身漂泊霸
周遊四國卒生涯
阿波伊豫我郷土
去伴浮雲悟悦時

四國遍路を想ふ

一杖身を託す漂泊の霸
四国を周遊して生涯を卒えん
阿波伊予は我が郷土
去きて浮雲に伴なう悟悦の時

野宮神社

船橋市

峻嶺 津田峻一

野宮神社

神域蕭蕭晝尚昏

蕭々として 昼尚お昏し

齋宮ト定入齋垣

齋宮ト定せられて 齋垣に入る

他年巫女下伊勢

他年 巫女伊勢に下り

故里遙懷黒木門

故里 遙かに懷う 黒木の門

奉納寫經

市原市 香苑 鶴岡志津子

写經を奉納す

山陬の古刹風篁歇み

境内雪晴れて 清きこと香るが若し

肅欲寫經臨淨几

つっしんで 経を写さんと欲し 净几に臨めば

千秋靜寂滿僧堂

せんしゅうせいかじやくそうどう 千秋の静寂 僧堂に満つ

柏市 貞華 富樫美代子

客中書懷

客中懷を書す

甲斐連山入故鄉
芙蓉高聳帶斜陽
白雲飛鳥相俱去
花下悠悠一路香

甲斐の連山故郷に入る
高く聳え斜陽を帶ぶ
白雲飛鳥相い俱に去り
花下悠悠一路香し

帝釈天瑞松

名松千歳寺門前
斗酒養根新翠鮮
恰似神龍橫臥態
覺醒忽爾欲昇天

名松千歳寺門の前
斗酒は根を養いて新翠鮮やかなり
恰も神龍横臥の態に似たり
覚醒すれば忽爾天に昇らんと欲す

船橋市 曙舟 長島ツタエ

帝釈天の瑞松

船橋市

中村八壽男

消夏偶成

消夏偶成

炎蒸連日苦翁身
流汗淋漓飲水頻
風鐸重鳴涼不有
秋聲切願莫逡巡

炎蒸連日翁身を苦しめしむ
流汗淋漓水を飲むこと頻なり
風鐸重ねて鳴るも涼有らず
秋声切に願ふ逡巡する莫れと

柏市

無堂　　日高廣人

新正所感

新正所感

邦家歲改瑞祥滋
回復政權雲漸披
又喜三朝梅信到
新詩欲賦早鶯時

邦家歲改まりて瑞祥滋し
政權を回復して雲漸く披く
又た喜ぶ三朝梅信の到るを
新詩賦せんと欲す早鶯の時

佐倉市 宮崎三郎

紺園看菊

紺園に菊を見る

展來淨域雨初晴
野菊閑園故友瑩
玉蕊金葩香馥郁
斜暉照處露盈盈

てんじきをればじょういき
やぎくせんかにまむこゆうのせい
ぎょくいききんぱこうふくゆ
しゃいきとうらすじゅつゆうえい

賀孫娘七五三

流山市 翠竹 宮本美恵子

孫娘の七五三を賀ぶ

蘭孫の衣着正に豪華

胡蝶開翎大帶加
簪髮玉釵搖漾動

ひらきだいたいくわ
はなまきようようどう

笑聲紅頬美於花
しようぜいかほうめうはな

しょうせいこうきょうめうはな

しょうせいこうきょうめうはな

鹿野山夏季鍊成書道會

市川市

莊石

森崎直武

鹿野山夏季鍊成書道會

上總遠く來れば田圃蒼し

林途風爽やかにして草花黃なり

鹿山の夕靄正に仙界

揮うこと好し清涼翰墨の場

上總遠來田圃蒼
林途風爽草花黃
鹿山夕靄正仙界
揮好清涼翰墨場

初冬夜坐

我孫子市

鏸風

矢尾

晃

初冬夜坐

天地蕭條草木衰

尚看守節傲霜枝

小齋夜靜眠難就

憶古哲人寫小詩

天地蕭條草木衰
尚看守節傲霜枝
小齋夜靜眠難就
憶古哲人寫小詩

自旭川至成田機上作

白雲雲上彩虹張
碧海碧霄合一廂
機影霧中鯨似泳
素波激灔太平洋

船橋市

溪風

八嶋溪風

旭川自り成田に至る機上の作

白雲雲上彩虹張り

碧海碧霄一廂に合す

機影霧中鯨泳ぐに似たり

素波激灔たり太平洋

小金井市

誼軒

柳田昌宏

鎌倉大佛看與謝野晶子歌碑

鎌倉大仏与謝野晶子の歌碑を見る

境内深閑綠樹邊

歌に詠ず釈氏は是れ清妍なりと

仍思大佛坐長久

微笑慈顏絶俗縁

微笑する慈顔俗縁を絶たり

市川市 消夏雜詩

和風

山下和子

市川市 消夏雜詩

和風

山下和子

苦熱炎威收亂蟬
無風柳樓上香煙
孔明說話興何盡
聞得秋風五丈天

苦熱炎威乱蟬を收め
風無く柳樓香煙上る
孔明の説話興何ぞ尽きん
聞き得たり秋風五丈の天

御前崎市 巴渓 山田紗代子

模櫧

模櫧(花梨)

野花開處有唐梨
綠葉纔黃果實垂
此樹昔時皇子植
秋香尚渡滿濃池

野花開く処唐梨有り
綠葉纔に黄にして果実垂る
此の樹昔時皇子植う
秋香尚お渡る満濃池

千葉県漢詩連盟 役員

顧問

石川岳堂

大山徳高

河内君平

川久保貞軒 廣野行甫

藤田梨那

相談役

金子靜修 杉山溪雲

会長

鷺野翔堂

副会長

八嶋溪風

常務理事

(事務局長)

菅原有恒

理事

相澤無有

飯塚祐城 薄井蹊山

椎名耕道

清水蔭山(事務局次長)

津田峻嶺

鶴岡香苑 富樫貞華

監事

矢尾鎌風

入会のご案内

本会は、漢詩創作や鑑賞を通じて会員相互の交流をはかるとともに、研究・普及活動にも力を注いでおります。又、作品発表の場も、「会報」、「千葉詩藻」「房総風雅」の発行と様々です。漢詩創作の場も、初級・中級の二講座を開催。さらに通信講座も併催しております。関心のある方の入会をお待ちしております。下記事務局までご一報ください。

編集後記

昨年三月の創刊に続き第二号を発刊することができました。ご協力に感謝いたします。今年は三月下旬に有志による台湾吟遊を実施いたします。作品を会報等で発表していただくことを楽しみにしております。平成二十七年は、五年に一度の『房総風雅』の発行が予定されておりますので、『千葉詩藻』の第三号発行は、平成二十八年二月となります。(清水蔭山)

平成二十六年三月二十日

編集発行 千葉県漢詩連盟

事務局 〒二七六一〇〇二三

千葉県八千代市勝田台二二七一

TEL・FAX ○四七一四八四一九三三五

菅原有恒

印刷 株式会社アクトローズ社